

令和 4 年度

函館白百合学園高等学校

推薦入学試験問題

国 語

令和 4 年 1 月 20 日(木)実施

注意事項

1. 試験時間は 50 分です。
2. 問題は□から□まであり、18 ページまであります。
3. 答えはすべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。

問三 次の□に適切な漢字一字を入れなさい。

- ① 彼の発言は、的を□たものだ。
- ② この仕事は、あと二、三日で□鼻がつく。
- ③ 彼女の歯に□着せぬ物言いは、実に痛快だ。

問四 次の□に後の漢字を入れて、四字熟語をそれぞれ完成させなさい。

- ① 傍□無□
- ② □果□報

物	人	応	古	若	結	吉	因
---	---	---	---	---	---	---	---

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

はつきりとも分らないことを、いかにも悪いように非難すると、逆に自分自身の無教養が暴露されるものだ。大体、彼は口が軽いということになってしまうと、

よくも心得ぬことを、あしざまに難じつれば、かへりて身の不覚、現はるるものなり。おほかた口軽きものになりぬれば、

「彼にはそのことを（１）。彼には（それを）見せるな」などと周りが言っ、他の人から（２）隔てられてしまうのは、残念だろう。

「それがしにそのことを①な聞かせそ。かの者にな見せそ」など言ひて、人に②心をおかれて隔てらるる、口惜しかるべし。

また、ある人が隠していたことが、偶然に漏れてうわさになると、（実際は違ふのに）あの人がお話しなされたのだなどと疑われるのは、面目の立たないことだろう。

また、人のつつむことの、おのづから漏れ聞こえたるにつけても、かれ話されしなど疑はれんは、面目なかるべし。

だから、いろいろ他の人のことを言うのを慎んで、ペラペラしゃべるのをやめた方がいい。

しかれば、③かたがた人の上を慎み、多言をやむべきなり。

『十訓抄』

問一 空欄（１）に入る——線①の口語訳を、五字程度で書きなさい。

問二 空欄（ 2 ）に入る——線②の口語訳として正しいものを、ア～エから選びなさい。

- ア 歓迎され
- イ 信用され
- ウ 用心され
- エ 軽蔑され

問三 ——線③のように、筆者が結論づける理由として不適当なものを、ア～エから一つ選びなさい。

- ア 自分の無教養が知られてしまうから
- イ 他の人から疎外されてしまうから。
- ウ 自分の秘密も偶然漏れてしまうから。
- エ 人の秘密を暴露した犯人と疑われてしまうから。

問四 ——線「かへりて身の不覚、現はるるものなり。」の中から、歴史的仮名遣いの文字を二つ抜き、それぞれ現代仮名遣いに改めなさい。

問五 『十訓抄』は鎌倉時代に成立した説話集であるが、ア～エから鎌倉時代に成立した作品を二つ選びなさい。

- ア 徒然草
- イ 平家物語
- ウ 源氏物語
- エ 枕草子

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

わしらは最近、ごはんを食べるのに二時間もかかりよる。いれ菌のせいではない。食べることに生きることとの、区別がようつかんようになったのだ。

① たとえばこうして婆さんが玉子焼きを作る。わしはそれを食べて、昔よく花見に行ったことを思いだす。そういえば今年はずちの桜がまだ咲いとらん、と思ひながら庭を見ると、婆さんはかすかに微笑ほほえんで、あの木はとづくに切ったじやないですか、と言う。二十年も前に、毛虫がついて難儀して、お爺さん御じい自分でお切りになったじやないですか。

「そうだったかな」

わしはぽっくりと黄色い玉子焼きをもう一つ口に入れ、そうだったかもしれん、と思う。そして、ふと箸を置いた瞬間に、その二十年間をもう一度生きてしまったりする。

婆さんは婆あじさんで、たとえば今も鰯たっおをつつきながら、辰夫は来年こそ無事大学に入れるといいですね、などと言う。

「ちがうよ。そりや辰夫じやない」

鰯aが コウブツの辰夫はわしらの (②) で、この春試験に失敗したのはわしらの孫、辰夫の (②) なのだった。説明すると、婆さんは少しも驚いた顔をせず、そうそう、そうでしたね、と言って微笑する。まるで、そんなのどちらでも同じことだというように。すると、白い御飯をゆっくりゆっくり噛かんでいる婆さんの、伏せたまつ毛を ③ 三十年も四十年もの時間が滑すべっていくのが見えるのだ。

(中略)

ふいに、わしは ④ 妙なことに気がついた。婆さんが浴衣ゆかたを着ているのだ。白地に桔梗ききょうを染めぬいた、いかにも涼し気なやつだ。

「お前、いくら何でも浴衣は早くないか」

わしが言うのと婆さんは穏やかに首をふり、目を細めて濡れ縁ぬ えんづたいに庭を見た。

「こんなにいいお天気ですから大丈夫ですよ」

たしかに、庭は（⑤）とあたたかそうだった。

「飯がすんだら散歩にでもいくか。土手の桜がちょうど見頃じゃろう」

婆さんは、ころころと **b** ウレウレしそうに声をたてて笑う。

「きのうもおとついてもそう仰おっしゃ有って、きのうもおとついてもでかけましたよ」

ふむ。そう言われればそんな気もして、わしは黙った。そうか、きのうもおとついても散歩をしたか。婆さんは、まだくつくつ笑っている。

「いいじゃないか」

⑥ 少し乱暴にわしは言った。

「きのうもおとついても散歩をして、きょうもまた散歩をしてどこが悪い」

はいはい、と言いながら、婆さんは笑顔のままでお茶をいれる。ほとほと、快い音をたてて熱い緑茶が湯呑ゆのみみにおちる。

「そんなに笑うと皺しわがふえるぞ」

わしは言い、浅漬あさづけのきゅうりをぱりぱりと食った。

土手は桜が満開で、散歩の人も多く、ベンチはどれもふさがっていた。子供やら犬やらでにぎやかな道を、わしらはならんでゆつくり歩く。風がふくと、花びらがたくさんこぼれおち、風景がこまかく白い模様になった。

「空気がいい匂においですねえ」

婆さんはうっとりと言う。

「いいですねえ、春は」

わしは無言で歩き続けた。昔から、感嘆の言葉は婆さんの方が得手なのだ。婆さんにまかせておけば、わしの気持ちまでちゃんと

C ダイベンしてくれる。(中略)

散歩から戻ると、妙子さんが卓袱台を拭いていた。

「お帰りなさい。いかがでした、お散歩は」

妙子さんは次男の嫁で、電車で二駅のところに住んでいる。

「いや、すまないね、すっかりかたづけさしちやって。いいんだよ、今これがやるから」

ひよいと顎で婆さんを促そうとすると、そこには誰もいなかった。

⑦ 妙子さんはほんの束のま同情的な顔になり、それからことさ

らにあかるい声で、

「それよりお味、薄すぎませんでした」

と訊く。

「ああ、あれは妙子さんが作ってくれたのか。わしはまたてつきり婆さんが作ったのかと思ったよ」

頭が少しぼんやりし、急に疲労を感じて濡れ縁に腰をおろした。

「婆さんはどこかな」

声にだして言いながら、わしはふいにくつきり思います。あれはもう死んだのだ。去年の夏、カゼをこじらせて死んだのだ。

「妙子さん」

わしは呼びかけ、その声の弱々しさに自分で驚いた。なんですか、と次男の嫁はやさしくこたえる。

「夕飯にも、玉子焼きと手鞠麩のおつゆを作ってくれんかな」

いいですよ、と言って、次男の嫁はあかるく笑った。

わしは最近、ごはんを食べるのに二時間もかかりよる。いれ歯のせいではない。食べることと生きることとの、区別がようつかんようになつたのだ。

『晴れた空の下で』 江國香織

※設問の都合上、漢字などの表記を改めました。

問一 線①「たとえば」とあるが、どういうことの例示をしようとしたのか。それを説明した次の文の【A】【B】【C】には五字以内の語を入れ、【C】には文中の二十八字の一続きの表現を探し、その最初と最後の五字を書き抜きなさい。

【A】と【B】が【C】こと。

問二 空欄(②)(二カ所)に入る漢字二字の語を自分で考えて書きなさい。

問三 —— 線③を説明した次の文章の【 A 】には自分で考えた三字の動詞を、【 B 】には文中の二十一字の一続きの表現を探し、その最初と最後の五字を書き抜きなさい。

—— 線③は、「婆さん」の心の中で、今まで生きてきた時間が一瞬のうちに「滑っていく」かのように【 A 】ことを表現しているが、それは「爺さん」も同じで、—— 線③は、その前にある【 B 】という表現と呼応している。

問四 —— 線④の「妙なこと」の説明として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 婆さんが食事中、あつという間に浴衣に着替えたこと。
- イ 婆さんがまだ昼間だというのに、浴衣姿だったこと。
- ウ 婆さんが桜の咲く春なのに、夏の浴衣姿だったこと。
- エ 婆さんの浴衣が、季節の合わない桔梗を染めぬいていたこと。

問五 空欄（⑤）に入る語として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア うらぶらぶら
- イ くぼくら
- ウ ふらぶら
- エ ゆらゆら

問六 ——— 線⑥の「わし」の心情を五十字前後で説明しなさい。

問七 ——— 線⑦とあるが、「妙子さん」はなぜ「同情的な顔」になったのか、四十文字前後で説明しなさい。

問八 この小説を読んで、生徒たちが話をしている。最も確な発言と思われるものを、A～Dから選びなさい。

A なんて、最初と最後の段落はまったく同じ表現を繰り返すのかな。何だか無駄な表現のように思えるんだけどな。

B いや、まったく同じ表現だからこそ、小説が首尾一貫性をもっていることが分かるし、読者はすっきりとした読後感を持てると思うよ。

C え？ よく読んでみなよ。最初と最後は一つだけ違うじゃない。それで、最初は作者の視点、最後は登場人物の視点だと分かるんだよ。

D 確かに一つ違うけど、最後は、主人公が長年連れ添った老妻を亡くしたことを思いだし、何か気弱につぶやいた言葉のように思えるよ。

問九 ——— 線 a ～ c を漢字で書きなさい。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

海外に行くと、仕事のいい加減さに驚かされることがある。購入した商品がすぐに故障したり、その質の悪さに呆れる^{あき}こともある。電車もバスも時間通りになかなか来ない。店員の接客の感じの悪さに苛立ち^{いらだ}を覚えることもある――。

そうした感じの悪さ、自己中心的な態度を少しでも改めさせるために、海外（とくに欧米）では顧客満足度の向上といったような考え方が導入されたのではないか。それでも未だに、日本と比べて相当いい加減だし、自己中心的に働いているように感じるのである。もともと日本では、客に対して丁寧で気持ちのよい応対をしていたものだった。それがごく自然に行われていた。

欧米に行くと、店員の^a素っ気ない態度に物足りなさを感じたりする人が多い。たとえ笑顔で親しみやすい雰囲気がある場合であっても、客に奉仕するといった雰囲気はない。購入した商品に不具合があつて、交換してもらうためにお店に行っても、申し訳なさそうな感じはなく、交換してやるという感じで、^①その対応は、とてもあつさりしたものである。商品の不具合は、販売員である自分の責任ではないのだから、個として生きる文化であれば、それは当然のことなのだろう。

だが、日本だったら、商品の不具合は技術者の問題であつて、販売員である自分の責任ではないにしても、非常に申し訳なさそうに^b謝り、^c丁寧な態度で交換するのが当たり前だろう。

そんな日本が、顧客満足（CS＝Customer Satisfaction）などというアメリカで生まれた考え方を、近年取り入れるようになった。そのような概念は、客にとって感じの悪い店員が目立ち、自分の責任じゃない、といった態度がまかり通るアメリカのような社会でこそ必要なものであった。しかし、日本がわざわざ導入するようなものではなかったはずである。

日本では、顧客満足度などという概念が必要ないほど、丁寧な仕事が行われてきた。それは商品の品質の良さにも、交通機関の運行時刻の正確さにも、^{【②】}にもあらわれている。もともと客は大切にされてきた。

ところが欧米コンプレックスが強い日本人は、「海外では……」といわれると、すぐに、

「そうか、日本は遅れてるな」

「だから日本はダメなんだ。海外（欧米）に学ばなくては」

と思ってしまう。

③ 文化の違いを考慮もせずに、何でもすぐに欧米流を取り入れるのがよいことだ、それが最先端なのだと思ってしまう。そして、文化的適合性を考えることもなく海外流を採用し、それで最先端に追従ついでしているような得意な気持ちになる。

④ こうして、顧客満足度といった概念が取り入れられるようになったのだから。

もともと客に丁寧な対応をし、客との信頼関係を大事にしてきた客商売の場に、顧客満足度などといった概念が取り入れられるようになって、従業員は過剰な「お客様扱い」を強いられるようになったのである。

⑤ それにより、客だけでなく従業員も大切にしてきた日本の組織が、従業員を追い込む組織になってしまった。（中略）

あえて「おもてなし」などと強調するまでもなく、私たち日本人はごく自然に人に対して気を遣ってきた。（中略）

「人の目を気にする日本人」などと自嘲じちやう気味にいつたりして、人の目を気にすることが、いかにもよくないことであるかのように批判するくせに、突然「おもてなし」などといい出す。これでは人々の頭のなかは混乱する。⑥ 人の目を気にしないで、どうしたら「おもてなし」がうまくできるのだろうか。

欧米コンプレックスの強い人たちは、日本人は人の目ばかり気にしているが、欧米人のように人の目など気にせずに、もっと自由に堂々と自分の思うことをいい、自分のやりたいようにやればいい、などといったりする。

だが、なぜ外国人と比べて日本人に『おもてなし』の精神」が豊かとされるのかをよく考えてみるべきだろう。（中略）

私は、欧米の文化を「自己中心の文化」、日本の文化を「間柄の文化」と名づけて対比させている。

「自己中心の文化」とは、自分が思うことを思う存分主張すればよい、ある事柄を持ち出すか持ち出さないかは自分の意見を基準に判断すればよい、とする文化のことである。常に自分自身の気持ちや意見に従って判断することになる。

欧米の文化は、まさに「自己中心の文化」といってよい。そのような文化のもとで自己形成してきた欧米人の自己は、個として独立しており、他者から切り離されている。

一方、「間柄の文化」というのは、一方的な自己主張で人を困らせたり嫌な思いをさせたりしてはいけない、ある事柄を持ち出すか持ち出さないかは相手の気持ちや立場を配慮して判断すべき、とする文化のことである。常に相手の気持ちや立場を配慮しながら判断することになる。

日本の文化は、まさに「間柄の文化」といえる。そのような文化のもとで自己形成してきた日本人の自己は、個として閉じておらず、他者に対して開かれている。

（『おもてなし』という残酷社会） 榎本博明

※設問の都合上、漢字などの表記を改めました。

問一 ―― 線①とあるが、それを説明した次の文の（ ）内に、文中から二十二字（句読点等を含む）の適切な表現を抜き出し、最初と最後の六字を答えなさい。

アメリカは個として生きる文化であり、この場合、店員は、（ ）と考えているから。

問二 空欄【②】に入ると思われる言葉を、文中の表現を利用して十五字前後で書きなさい。

問三 線③とあるが、欧米の文化の特徴を端的に表している語句を七字で、日本の文化の特徴を端的に表している語句を五字で書き抜きなさい。

問四 線④とあるが、「顧客満足度」という概念が日本に取り入れられるようになった経緯について、筆者はどのように考えているか、八十字以内で説明しなさい。ただし、「もともと」という語から文を始め、「取り入れた。」で文を終わるようにすること。

問五 線⑤「それ」の指示する内容を、五十字以内で説明しなさい。

問六 ―― 線⑥の文の意味について、話し合っている生徒A～Dの中で、正しい理解をしているのは誰か。A～Dから選びなさい。

A これは疑問文で問題提起だね。「人の目を気にしないで、うまくおもてなしをする」には、どうしたらいいかが、この後、論じられると思うよ。

B いや、これは疑問文の形だけど、反語表現だと思うよ。「人の目を気にしないで、うまくおもてなしなんかできるわけがない」っていう意味さ。

C どうかな。たとえば「雨かい？」って聞いている人が「雨が降っている」と知っている場合があるよね。だからここも「うまくおもてなしができる」と思ってるんだよ。

D いやいや、その前に『人の目を気にする日本人』などと自嘲気味にいたりして」とあるから、これも筆者のつい人目を気にすることへの自嘲の言葉じゃないのかな。

問七 ——— 線⑦とあるが「日本人の自己」のあり方を示す具体例として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 旅先では、人目を気にせず、自分勝手に振る舞う。
- イ 人は人、自分は自分といつも考え、行動する。
- ウ 相手の気持ちを考えると、はっきりと反対はできない。
- エ 常に自分の利益を優先して、行動を選択する。

問八 ——— 線 a ～ c をひらがなに改めなさい。

推薦入試

令和四年度 函館白百合学園高等学校入学試験

国語

解答用紙

受験番号

氏名

100 得点

一 問一 ① 審議 ② 追及 ③ 戒め ④ 裁かれる ⑤ 関心
⑥ 増刷 ⑦ 改訂 ⑧ 変異
問二 ① えいたん ② ふところ ③ じゅうなん
④ にゆうわ 問三 ① 射 ② 目 ③ 衣
問四 ① 傍若無人 ② 因果応報 問五 ① エ ② オ 問六 イ

大問1 各1点
問四は完全解答

20 小計

二 問一 聞かせるな 2点 問二 ウ 2点 問三 ウ 2点 問四 へ → え 完全各1点
は → わ 歴史的 現代 歴史的 現代
問五 ア イ 各1点 順不同 順不同

10 小計

三 問一 A 爺さん 1点 B 婆さん 1点 C 食べること うになったこと。
問二 息子 2点 別解 お爺さん、お婆さん
問三 A 流れる 2点 B その二十年 う たっぷりする 完全2点
問四 ウ 3点 子供 問五 ア 3点 過ぎる 完全2点

35 小計

問六 きのおもとおとといも散歩に出かけたというのを
忘れていたのを婆さんに指摘され、腹立たしかっ
た。 7点
問七 お爺さんが自分の妻が亡くなったことを忘れてい
ることに気づき、気の毒に思ったから。 6点
問八 D 3点 問九 a 好物 1点 b 嬉しそう 1点 c 代弁 1点

四 問一 商品の不具合 う 責任ではないと考えているから。 完全3点
問二 客に対する丁寧で気持ちのよい対応 3点
問三 欧米の文化の特徴 自己中心の文化 3点 日本の文化の特徴 問柄の文化 3点

35 小計

問四 もともとも客に対し丁寧な対応をしてきた日本人には必要
のないものだったが、欧米コンプレックスが強い日本人
が、欧米のものとはとにかく最先端だからと考えて取り入
れた。 8点

問五 「顧客満足度」という概念が取り入れられて、従業員が
過剰なお客様扱いを強いられるようになったこと。 6点
問六 B 3点 問七 ウ 3点 問八 a そっけない 1点
b あやまり 1点 c ていちょう 1点

100 得点